

総理の風格

はじめに

翁 久次郎

私が昭和四十五年一月、内閣官房総務課長となつてから、総理大臣の国会における施政方針演説案を安岡正篤先生にお見せし、そのご意見を伺うことが仕事の一部となり、爾來、安岡先生の知遇を受けるようになった。大体、月に一回程度、先生を囲んで官房の課長や総理大臣秘書官が食事を共にしながら、先生の四方山のお話をお聞きする会が持たれるようになったのも、その頃からである。

昭和二十年八月、敗戦処理のため組閣した東久邇内閣及び弊原内閣総辞職の後をうけた吉田茂首相は、たびたび安岡先生を総理官邸や私邸に招き、「老先生」と呼んで教えを受けたといわれている。吉田さんの生れは明治十一年、安岡先生は明治三十一年であるから、実に二十歳も若い先生を師と仰いだのである。吉田さんの岳父、牧野伸顕は、安岡先生が二十六歳の折にその見識の凡ならざるもののあることを知り、陰に陽に先生の後見人としてその活動を支えるようになった。そのことを知る吉田さんが、先生を遇すること極めて篤かつたのも不思議ではない。従つて吉田さんの後をついで首相をつとめた池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、福田赳夫、大平正芳の各氏が、先生とご縁が深かつたのも当然といえよつ。

特に池田派の政策集団が結成された時には安岡先生にその会名の依頼があり、先生はこれに「宏池会」

と命名された。それは中国後漢の馬融の故事から採られたものであり、彼は後漢の女帝時代の高官で学徳極めて高く、常に諸生数千人を擁して人材の養成に努めたといわれる人物で、その事跡を称えた広成頌の中に「高光（宮殿の名稱）の樹に休息し、以て宏池（広大な池）に臨む」とあるのに由来し、同時に池田の姓名にちなんだものといえよう。

大平さんと安岡先生とのつながり

先生の高弟、林繁之さんの『安岡先生動情記』によれば昭和三十四年三月某日、「大平正芳氏飄然先生を訪問、当時大平氏の自宅は先生の白山下の住居の近くにあったので、それを理由にしてとのこと、用談というほどのことはなく、学生時代より先生の書物は殆んど読んでいることなどを話して帰る」と誌されている。大平さんと安岡先生とのつながりは、宏池会という政治集団をこえて、既に若かりし学生時代から始まっていたことが分る。

昭和三十五年六月、日米安全保障条約の改定が国内の騒然たる反対運動の中で自然成立し、岸内閣が退陣した。七月、池田内閣が誕生し、大平官房長官によつて新内閣のキャッチフレーズ「寛容と忍耐」が唱えられたが、マスコミはこれを「低姿勢」と称した。この頃の一夕、池田総理と大平官房長官が安岡先生を囲んで食事を共にしている。その折、新内閣の高姿勢、低姿勢が話題となったが、先生は「二つながらならず、すべからず正姿勢たるべきである」といわれ、両者は深く肯いたという。

池田内閣の誕生以来、大平官房長官はしばしば先生を訪れるようになり、用件のある時もあれば、何気なく訪う時もあつて、そうした時、先生は林さんに「今日も朝出がけだと言つて寄つたが、用件らしいものは何もなかった。彼はなかなかの読書家だね」と語つておられる。また池田内閣の官房副長官に起用された細谷喜一氏は、安岡先生が主宰する師友協会の常務理事で大平官房長官の推挙によるものといわれ、

マスコミは異例の人事と評した。その後、昭和三十九年、第三次池田内閣の改造で大平さんは閣外に去り、間もなく池田首相は病に倒れて十一月、佐藤内閣が生まれた。

やがて昭和四十六年三月、宏池会の会長となった大平さんは、先生を訪れて、「いろいろありましたが、このたび先生が名付け親である宏池会を引き受けることになりました」と挨拶し、長時間にわたって懇談している。

昭和五十三年十二月、自由民主党の総裁選挙が行われたが、大方の予想とは逆に大平さんが総裁に選ばれ、第一次大平内閣が誕生した。当時、私は厚生省の事務次官をしていたが、組閣後一週間を経て田中六助官房長官から、橋本龍太郎厚生大臣に私を官房副長官に起用したい旨の連絡があり、思いもかけず大平総理にお仕えすることとなった。それまで大平さんに直接、仕えたことはなく、国会の総理大臣室で田中官房長官立ち合いのもとに辞令を受けたのが、お二人にお会いした始めであった。

昭和五十四年五月、訪米から帰国した大平総理が先生をお招きして懇談したが、その折、世間には私のことを統率力がないとか、言葉がはつきりしないといった批判をしている者があると先生に話されたのに対し、「今度のカーター大統領との会談で、あなたが日米のパートナーシップを強調されたが、あれは立派な見識であり、今までの総理にはなかったことだ」といわれ、総理もこの言葉に勇気づけられたとのことである。この訪米以来、カーター大統領と大平さんとの間には固い友情が生れた。それは大平総理が逝去して日本武道館での葬儀の際に、大統領が進んで参列されたことにも表われている。

私は大平さんが一国の首相として内外多事多難の折に日夜、心を砕いておられた一年半の間お仕えしたが、会議の席や食事の折などでのさり気ないお話を通して、総理の風格とはこうしたものかとの感を深くしたことは一再ではない。総理大臣は孤独に耐えなければならぬ。内閣の最終の責任は総理大臣にあり、国際場裡においても時に勇断をもって臨まなければ、その国の主権が損われることもある。私は内閣官房

総務課長として佐藤、田中のお二人に仕え、副長官として大平、鈴木のお二人に仕えた。それぞれのお人柄、個性は異つていても、総理大臣としての重責がおのずからその人に一種の風格を備えしめるものと思ふ。佐藤さんの沖繩返還、田中さんの列島改造、大平さんの環太平洋連帯構想と東京サミット、鈴木さんの参議院選挙制度の改正と行政改革など、そのいずれを取つても、結果如何によつては内閣の消長にかかわり、国の前途を危うくするものである。

それには総理大臣を支える閣僚の補佐が重要となるが、特に大平さんの場合、田中六助、伊東正義の二人の官房長官は、いずれも身命を賭して総理を支え、命運を共にした仲であつた。伊東さんは政界に入つて宏池会の一員となつた時、大平君がいるので宏池会を選んだといつて池田さんを怒らせた人である。

激務の続く中での読書

大平さんは激務の続く中、暇を見つけては書店に行き一度に五、六冊の本を買い、それをかかえて嬉しそうに官邸に帰つてこられた。総理の部屋に伺つと自室にはおられず、隣の秘書官室の小さな椅子に腰を掛け、秘書嬢の机の上にあるチヨコレートをつまんでおられることもあつた。私が大阪府庁に出向していた頃、親しくして頂いた元大阪府中之島図書館長の中村祐吉さんが、イギリスの宰相アスキスの波乱に富んだ一生を中心とした十八世紀イギリス議會政治の内幕を叙述した『イギリス政変記』を上梓され、それを大平さんに差し上げたが、何日かたつて所用で総理室に伺つたところ、大きなヨーロッパの地図を掲げて熱心に『イギリス政変記』を読んでおられるのを見て、驚いたこともあつた。

昭和五十五年六月、憲政史上初めての衆参同日選挙が行われたときは、大平さんは訪米に引き続いて五月八日にはユーゴのチトー大統領の葬儀に参列し、帰国直後に内閣不信任案可決という最悪の事態の中で五月三十日、新宿駅頭での第一声となつたのである。肉体的にも精神的にも大変な重圧の中で過密なスケ

ジュールをこなす苦しさは、外部からは容易に分る筈もなく、遂に横浜での遊説中に倒れ、五月三十一日早暁、虎の門病院に入院した。その後、一時は快方に向つたものの六月十二日、帰らぬ人となった。選挙戦の最中であり、イタリーのベネチアで行われるサミット直前でもあつた大切な時期での現職総理の死は、国民に大きな衝撃を与えた。

新聞のコラムにみる大平評

当時の新聞のコラムは、次のように書いている。

「大平さんはかつて『寛容と忍耐』というキャッチフレーズを作り、せっかちな池田さんを抑え、上手に内閣を運営したことでも分るように、極めて慎重な人で決して暴走せず、左右の意見をよく聞いて行動する人、安心して政治を委せられる人であつた。派手で名前だけの政策を掲げて世の中を騒がせたり、国民に迷惑をかける首相もあつたが、大平さんは必要でないことは何もしない、必要最小限のことをやり、あとは国民の自由に委せるとの考え方の人であつた。また『おれについてこい』といった思い上つた姿勢は嫌いであつた。さきの国会で議員の質問に対して『日本国民は大変すぐれた国民で、こうした苦しい困難な環境のもとでも、生産性の向上をやり遂げるだけの力量をもっている。従つて、私は国民を指導しようというような大それた考えは持っていない。』と答えているが、それは『民を愛し国を治めて能く無為たらん』という老子の哲学に近い。繁栄し安定している現在の経済を不景気と認識して、これをインフレに駆り立てる政治家や、他国の軍事的脅威を宣伝して防衛力の増強をとねえる政治家の出現は、日本によい結果をもたらさない。云々」とあつた。

大平さんの葬儀は内閣・自由民主党合同葬と決められ、伊東官房長官が葬儀委員長となつて七月九日、

日本武道館で行なわれた。天皇后兩陛下の勅使をはじめ、各国の元首、外交使臣は百名をこえ、国内各界の代表とともに哀しみの中に参列して莊重に執り行なわれた。これより先に葬儀委員長の弔辞を安岡先生にお見せしてご意見を伺ったところ、先生は自ら筆を取られ、「入院わずかに旬日余、天命は非情にもあなたを天上白玉楼に迎え取ったのであります」の一句を挿入された。葬儀場で「神は時代が最も危険な曲がり角に処する時、あなたを選んで我が国の指導者とし、その運命を託されました。あなたは深い思索と倦むことを知らない努力によって、立派にその使命を果たされたのであります」と読みあげる伊東さんの一語一語には、盟友のありし日を偲ぶ万感無量の思いが込められていた。

伊東さんによる大平総理の墓石に刻まれた撰文は、次のとおりである。

君は永遠の今に生き

現職総理として死す

理想を求めて倦まず

斃れて後已まざりき

(第一、第二次大平内閣官房副長官)